

平成29年度入学式告辞

九州工業大学学長 尾家 祐二



ご入学おめでとうございます。

春爛漫の今日、ここに入学式を挙行するにあたり、栄えあるこの日を迎えられる皆さんに、心からお祝いを申し上げます。そして、これまでのご努力に敬意を表します。国立大学法人九州工業大学に皆さんを迎えることができましたことは、この上ない喜びであります。御列席の御家族の皆様におかれましても、お喜びのことと拝察致します。教職員を代表してお祝い申し上げます。

これから皆さんが学ばれる九州工業大学は、1909年に開校した私立明治専門学校を前身としています。

創立者は、安川敬一郎氏です。わが国の産業の礎となった北九州及び筑豊地域で安川電機の設定など様々な産業を興された経済界の重鎮です。

明治時代の日本は、産業面、経済面において、当時の世界の大国からは、大きく遅れをとっていたため、国家を支える人材育成が必要でした。安川先生は、「国家によって得た利益は国家のために使うべきである。」という信念から巨額の私財を投じ、我が国の産業の振興を支える技術者を育成する明治専門学校を創設されました。

安川先生は明治専門学校で教育と研究を、東京帝国大学総長であられた山川健次郎先生に託されました。山川先生は、開校式において、明治専門学校を「技術ニ通ジテイルジェントルマンヲ養成スル学校デアール」と宣言され、品格と創造性をもつ人材を輩出することを目指されました。この山川先生の志は、「技術に堪能

なる士君子」の養成という本学の建学の理念として、100年以上の歴史を超えて脈々と伝えられ、現在に至っています。新入生の諸君は「技術に堪能なる士君子」という言葉をこの場で覚えていただきたいと思えます。

明治専門学校は、その後1949年に国立九州工業大学となり、2004年から国立大学法人九州工業大学となりました。この間に、飯塚市に昨年度30周年を迎えた情報工学部、17年前に若松の北九州学術研究都市に大学院生命体工学研究科を設置し、2学部3学府・研究科、学生数約5800名を擁する、わが国有数の個性豊かな工学系大学となり、現在に至っています。

私は、昨年4月に学長に就任いたしました。現在、本学の教育、研究活動そして皆さんの学習活動がさらに豊かになるよう、さらに活力あるものになるように改善を進めているところです。その一環として、海外の大学との連携強化を図るために、6つの国と地域における11大学を訪問しました。11の4年制大学等を含む、米国有数の大学ニューヨーク市立大学も、それら訪問校の一つです。

その中の、マンハッタン島にあり、シティカレッジ(City College of The City University of New York、略してCity College of New York、CCNY)を訪問し、学生、教員の交流をさらに活性化することに合意し、連携協定書に署名しました。さて、そのニューヨーク市立大学の前身は、1847年に設立された無料のフリーアカデミーです。日本は、そのとき、江戸時代です。そして設立したのは、その後1858年に日米修好通商条約に尽力したタウンゼント・ハリス氏です。このことについて司馬遼太郎氏はその著書「街道をゆく39ニューヨーク散歩」において、ニューヨーク市教育局長であったハリス氏が、「まずしい少年少女のために、私財を投じ」、フリーアカデミーをつくったことを紹介しています。まさにこの学校が、現在のニューヨーク市立大学に発展しました。

時代、国は異なりますが、九州工業大学およびニューヨーク市立大学を設立した人たちについて思いを合わせると、人が学ぶことの大切さを強く感じた人たちによって今日の私達

があると、改めて感じます。

それでは、この機会に、これから入学後に、学び続けるうえで大事な二つのことについてお話をしたいと思います。それは、学びの原点に関することです。

まず、最初に、「考えることと学ぶこと」についてです。論語に「学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆し」という言葉があります。戦後、日本のオピニオンリーダーだった加藤周一氏が、講演の中で（加藤周一著「学ぶこと 思うこと」岩波ブックレット）、この言葉を取り上げ、次のように述べています。「学んでも自ら考えなければダメだ、本当の知識にはならない。たとえ自ら考えていても学ばなければ、その人の、あるいはその集団の行動は危うい」と。そして、考えるということとは、問題性を意識することであると指摘しています。「考える」とは、すなわち、自ら、何が不明で、何が問題なのかを知ることから始まります。したがって、主体的に、何を学ぶべきかを考えなくてはなりません。

せん。考えることと学ぶことの両輪が大切です。例えば、歴史を学ぶ時は、歴史を事実の積み重ねと捉えるだけでは、十分ではありません。歴史学者であるE.H.カーは、その著書の中で「歴史とは現在と過去との対話」であると述べています。単に、事象や年代を記憶するだけによって歴史を捉えるのではなく、過去の事象を紐解き、今の社会が抱える問題等と結びつけ、様々な考察をするところが大事だと言えます。考えることと学ぶことの連続によって、対象となるものを適切に理解できるようにになると同時に、自分自身が変化、成長していく機会となります。

もう一つは、「学び方」です。私達の理解の仕方は、私達が持っている知識、経験そして様々な情報に大きく影響されます。私達を取り巻く状況も、何らかの情報として取り入れられます。人はそれぞれ、嬉しかったり、悲しかったりした経験があり、それぞれの人にとって、切実な知識や情報として、記憶されています。一方で、物事の理解の仕方について、紀元前のローマのカエサルがすでに

次のようなことを言っています。「人間はみな見たいものしか見ようとし（塩野七生著「ローマ人の物語」新潮社）と。これは、どういこうとでしょう？ 私達は、自分で持っている知識、様々な情報をもとに、適切に理解しようとしているのではなかったのでしょうか？

最近の脳の研究成果からも、興味深い事実が明らかになっています。それは、私達の脳は、私達の脳に入ってきた情報を基に、「解釈」を付け加え、結論づける高い能力を持っているということなんです。この解釈の仕組みを「インテグレーション・モジュール」と言います。脳の中の、「インテグレーション・モジュール」は、因果関係を成立させたくてしかたがない。そのときの認知状況や周囲から得られる手がかりをもとに、たえず世界を説明している。左脳で行われるインテグレーションのプロセスの背景には、起こったことの説明や原因を知りたいという衝動がある」（マイケル・S・ガザニガ著「わたし」はどこにあるのか ガザニガ脳科学講義」紀伊国屋書店）とのことです。この能力によって、我々人間が、想

像して、思考して、判断し、そして行動することが可能になり、困難な課題を乗り越えることができたのでしょう。しかし、一方では、限られた情報に因果関係を見出そうと思いつ過ぎると、思い込み、誤解も生じやすくなる可能性があることを示しています。私たちは、自分自身の知恵だけでなく、多様な知識、経験、情報を持つ人たちとの対話、交流などを通じて、その人たちの知恵を学ぶことがとても大事であります。

九州工業大学では、今、対話、交流などを引き起こすような学びを重視し、そのような多様な学びの機会と学びの環境を作ることを推進しています。孤立してしまうのではなく、正課の学習、正課外の学習コミュニティ、部活、サークルなど、様々な機会に、対話、交流などを通じ、互いが学び合い、相互作用することにより、自分自身を知ることができ、自分自身を高めることができると考えます。

正課外の学習コミュニティの活動として、学生創造学習支援プロジェクトがあります。皆さんが、自主的

にグループを作り、企画して、応募することが出来ます。学内では、ロボットやロケット、超小型衛星、自動車等自分達が興味のあるテーマのもと、仲間を集め、国内外の技術系競技会に参加するなど、大変貴重な経験をしています。ものづくりの過程において、バラバラであった知識やスキルが有機的に繋がり、別の機会に、またそれらの知識やスキルを活用できることも大事です。さらに、具体的な課題を通して、抽象化された理論、論理的な思考の大切さを実感する機会にもなります。それら以上に、自ら、何かに参加、関与することによって、相互作用を通じて学び続ける姿勢、そのものを学ぶ機会となることを期待しています。

そのような学習機会の一つとして、学生の海外派遣を推進しています。平成26年度は330名、平成27年度は430名、そして、昨年度は約500名以上の学生が海外での学びを経験しています。その中には、海外の企業でのインターンシップを経験したり、欧州の大学に半年間程度も滞在した学生もいます。本学の学習のグローバル化は確実に進展しています。異なっ

た国に身を置き、多様な文化の人達と共に考え、学ぶことによって、考えや行動が変容し、成長する機会となつていきます。

皆さんも、教室内の学習だけでなく、学生プロジェクトや海外留学等に積極的に参加し、相互作用を通じて、考え、他者から学び、成長に繋げてください。

九州工業大学自身も、産業界、自治体、報道関係者等、社会との様々な対話、国際的な大学間連携を通じて、さらによりよい大学になるよう、かけがえのない大学となるように心がけていきます。

最後となりましたが、入学された皆さんが、健康に十分留意され、知を好む人たちが集まる場所であるこの大学で、様々な学習機会と環境を活用し、意義ある大学生活もしくは大学院生活を過ごされますことを重ねて希望致しまして、告辞と致します。本日は誠におめでとうござい

ます。